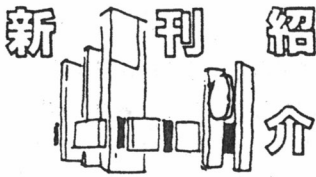


新刊紹介



戸木田嘉久著

21世紀の労働運動を考える基礎学習文献 「労働組合の原点」

著者の前書きにあるとおり本書は「労働運動」誌に99年のほぼ1年にわたり連載された「入門講座＝労働組合——過去・現在・未来」に大幅な加筆・改訂・補強とともにおおくの注釈と資料や写真を加えて一冊にまとめられたものである。連載の表題からもわかるように本書が科学的社会主義の労働組合論であるマルクスの「労働組合——その過去・現在・未来」(巻末にその全文が掲載されているが本書ではわずか2ページ)をテキストとしつつ、日本の労働組合運動の歴史と現状を簡潔に要約しつつそのさらなる発展方向の検討にあてられている。

内容は序章の「いまなぜ、古典から労働組合論を学ぶのか」から第10章の「日本の労働組合——その現在・未来」までマルクスとともにエンゲルス・レーニンなどによる労働組合論が豊富に引用され科学的社会主義にもとづく合法的発展が解明されが、その内容は第1章から第8章までに適切で簡潔な表題で区分され展開される。とりわけ第5章制度的要求闘争、第7章経済闘争と政治闘争は今日の日本の労働組合運動との関連で深く読み取るべき内容である。

日本の労働組合の過去・現在・未来を論じる第9章・第10章は筆者が1940年代後半から民間研究機関や大学の研究者として活躍しつつ、つい最近まで労働総研代表理事として三井三池大争議や国鉄分割民営化など日本の労働組合運動が直面した重要問題と直接・間接にかかわり、たたかう労働者を支援するために奮闘してきた立場からの経験と教訓が生かされている。

現在、日本の労働組合は組織率低下や青年層の組合離れとともに社会的影響力の希薄化など重大な問題に直面しているが、市場原理至上主義による独占

資本と追従する政治の攻撃の結果にほかならない。しかし、急速に進む労働者の労働と生活悪化は職場・地域とともに労働戦線の枠を越えた要求実現の運動に変化をもたらしている。

日本の労働組合運動の転換期である21世紀初頭にあたり、本書が主題とする科学的社会主義にもとづく労働組合論が幹部活動家の理論学習とともに、青年層の基礎学習にも活用することができるだろう。日本における強力な労働組合運動再構築の土台造りとなる学習テキストとしての購読と活用を期待したい。

(草島和幸・くさじま かずゆき・労働総研事務局長)

浅井春夫著

「新自由主義と非福祉国家への道 社会福祉基礎構造改革のねらいとゆくえ」

政府は今年に入って相次いで、社会保障制度の今後の在り方についてまとめ発表している。7月には税制調査会「中間答申」で財政の在り方を、9月には社会保障制度審議会「新しい世紀に向けた社会保障(意見書)」、10月には「21世紀の社会保障構造の在り方を考える有識者会議『21世紀に向けての社会保障(案)』」では、国民の給付抑制と負担増を押しつけ、一方で国庫負担の削減と規制緩和による市場化路線を打ち出している。

このように、政府は21世紀を前に社会保障の構造的再編の方向をあらゆる機会をとらえて打ち出している。そして国会では、審議と与党の数の力でごり押しし、国民にその内容を明らかにしないまま悪法を次々に成立させている。

6月にあけび書房より出版された浅井春夫著「新自由主義と非福祉国家への道 社会福祉基礎構造改革のねらいとゆくえ」は、この間の政府の社会保障構造改革路線をていねいに説き明かしている。政府・財界がねらう介護保険・高齢者医療制度・年金制度の総合的「改革」について、「根本を学ぶ絶好のテキスト」として是非ご活用いただければと思う。

本書は、社会福祉基礎構造改革がわが国を非福祉国家へ変質させる「改革」であり、その背景である新自由主義＝新古典派経済学の理念と考え方、具体